石川啄木全歌集総索引

『一握の砂』

我を愛する歌

1

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

2

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

3

大海にむかひて一人
七八日
泣きなむとすと家を出でにき

4

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに

5

ひと夜さに嵐来りて築きたる
この砂山は
何の墓ぞも

6

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日

7

砂山の裾によこたはる流木に
あたり見まはし
物言ひてみる

8

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

9

しつとりと
なみだを吸へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな

10

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて帰り来れり

11

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

12

ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

13

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

14

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

15

飄然と家を出でては
飄然と帰りし癖よ
友はわらへど

16

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

17

わが泣くを少女等きかば
病犬の
月に吠ゆるに似たりといふらむ

18

何処やらむかすかに虫のなくごとき
こころ細さを
今日もおぼゆる

19

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

20

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

21

こみ合へる電車の隅に
ちぢこまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ

22

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で来しさびしき心

23

愛犬の耳斬りてみぬ
あはれこれも
物に倦みたる心にかあらむ

24

鏡とり
能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

25

なみだなみだ
不思議なるかな
それをもて洗へば心戯けたくなれり

26

呆れたる母の言葉に
気がつけば
茶碗を箸もて敲きてありき

27

草に臥て
おもふことなし
わが額に糞して鳥は空に遊べり

28

わが髭の
下向く癖がいきどほろし
このごろ憎き男に似たれば

29

森の奥より銃声聞ゆ
あはれあはれ
自ら死ぬる音のよろしさ

30

大木の幹に耳あて
小半日
堅き皮をばむしりてありき

31

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

32

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聴く

33

ふと深き怖れを覚え
ぢつとして
やがて静かに臍をまさぐる

34

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り来しかな

35

何処やらに沢山の人があらそひて
鬩引くごとし
われも引きたし

36

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

37

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼
このごろ気になる

38

鏡屋の前に来て
ふと驚きぬ
見すぼらしげに歩むものかも

39

何となく汽車に乗りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

40

空家に入り
煙草のみたることありき
あはれただ一人居たきばかりに

41

何がなしに
さびしくなれば出てあるく男となりて
三月にもなれり

42

やはらかに積れる雪に
熱てる頬を埋むるごとき
恋してみたし

43

かなしきは
飽くなき利己の一念を
持てあましたる男にありけり

44

手も足も
室いつぱいに投げ出して
やがて静かに起きかへるかな

45

百年の長き眠りの覚めしごと
呿呻してまし
思ふことなしに

46

腕拱みて
このごろ思ふ
大いなる敵目の前に躍り出でよと

47

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に会ひしに

48

こころよく
人を讃めてみたくなりにけり
利己の心に倦めるさびしさ

49

雨降れば
わが家の人誰も誰も沈める顔す
雨霽れよかし

50

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

51

この日頃
ひそかに胸にやどりたる悔あり
われを笑はしめざり

52

へつらひを聞けば
腹立つわがこころ
あまりに我を知るがかなしき

53

知らぬ家たたき起して
遁げ来るがおもしろかりし
昔の恋しさ

54

非凡なる人のごとくにふるまへる
後のさびしさは
何にかたぐへむ

55

大いなる彼の身体が
憎かりき
その前にゆきて物を言ふ時

56
実務には役に立たざるうた人と
我を見る人に
金借りにけり

57
遠くより笛の音きこゆ
うなだれてある故やらむ
なみだ流るる

58
それもよしこれもよしとてある人の
その気がるさを
欲しくなりたり

59
死ぬことを
持薬をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

60
路傍に犬ながながと呿呻しぬ
われも真似しぬ
うらやましさに

61
真剣になりて竹もて犬を撃つ
小児の顔を
よしと思へり

62
ダイナモの
重き唸りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし

63
剽軽の性なりし友の死顔の
青き疲れが
いまも目にあり

64

気の変る人に仕へて
つくづくと
わが世がいやになりにけるかな

65

竜のごとくむなしき空に躍り出でて
消えゆく煙
見れば飽かなく

66

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ

67

空寝入生呿呻など
なぜするや
思ふこと人にさとらせぬため

68

箸止めてふつと思ひぬ
やうやくに
世のならはしに慣れにけるかな

69

朝はやく
婚期を過ぎし妹の
恋文めける文を読めりけり

70

しつとりと
水を吸ひたる海綿の
重さに似たる心地おぼゆる

71

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗きむなしさ

72
けものめく顔あり口をあけたてす
とのみ見てゐぬ
人の語るを

73
親と子と
はなればなれの心もて静かに対ふ
気まづきや何ぞ

74
かの船の
かの航海の船客の一人にてありき
死にかねたるは

75
目の前の菓子皿などを
かりかりと嚙みてみたくなりぬ
もどかしきかな

76
よく笑ふ若き男の
死にたらば
すこしはこの世のさびしくもなれ

77
何がなしに
息きれるまで駆け出してみたくなりたり
草原などを

78
あたらしき背広など着て
旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる

79
ことさらに燈火を消して
まぢまぢと思ひてゐしは
わけもなきこと

80
浅草の凌雲閣のいただきに
腕組みし日の
長き日記かな

81
尋常のおどけならむや
ナイフ持ち死ぬまねをする
その顔その顔

82
こそこその話がやがて高くなり
ピストル鳴りて
人生終る

83
時ありて
子供のやうにたはむれす
恋ある人のなさぬ業かな

84
とかくして家を出づれば
日光のあたたかさあり
息ふかく吸ふ

85
つかれたる牛のよだれは
たらたらと
千万年も尽きざるごとし

86
路傍の切石の上に
腕拱みて
空を見上ぐる男ありたり

87
何やらむ
穏かならぬ目付して
鶴嘴を打つ群を見てゐる

88

心より今日は逃げ去れり
病ある獣のごとき
不平逃げ去れり

89

おほどかの心来れり
あるくにも
腹に力のたまるがごとし

90

ただひとり泣かまほしさに
来て寝たる
宿屋の夜具のこころよさかな

91

友よさは
乞食の卑しさ厭ふなかれ
餓ゑたる時は我も爾りき

92

新しきインクのにほひ
栓抜けば
餓ゑたる腹に沁むがかなしも

93

かなしきは
喉のかわきをこらへつつ
夜寒の夜具にちぢこまる時

94

一度でも我に頭を下げさせし
人みな死ねと
いのりてしこと

95

我に似し友の二人よ
一人は死に
一人は牢を出でて今病む

96

あまりある才を抱きて
妻のため
おもひわづらふ友をかなしむ

97

打明けて語りて
何か損をせしごとく思ひて
友とわかれぬ

98

どんよりと
くもれる空を見てゐしに
人を殺したくなりにけるかな

99

人並の才に過ぎざる
わが友の
深き不平もあはれなるかな

100

誰が見てもとりどころなき男来て
威張りて帰りぬ
かなしくもあるか

101

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢつと手を見る

102

何もかも行末の事みゆるごとき
このかなしみは
拭ひあへずも

103

とある日に
酒をのみたくてならぬごとく
今日われ切に金を欲りせり

104
水晶の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ

105
事もなく
且つこころよく肥えてゆく
わがこのごろの物足らぬかな

106
大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し
それにむかひて物を思はむ

107
うぬ惚るる友に
合槌うちてゐぬ
施与をするごとき心に

108
ある朝のかなしき夢のさめぎはに
鼻に入り来し
味噌を煮る香よ

109
こつこつと空地に石をきざむ音
耳につき来ぬ
家に入るまで

110
何がなしに
頭のなかに崖ありて
日毎に土のくづるるごとし

111
遠方に電話の鈴の鳴るごとく
今日も耳鳴る
かなしき日かな

112
垢じみし袷の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃焼くるにほひす

113
死にたくてならぬ時あり
はばかりに人目を避けて
怖き顔する

114
一隊の兵を見送りて
かなしかり
何ぞ彼等のうれひ無げなる

115
邦人の顔たへがたく卑しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

116
この次の休日に一日寝てみむと
思ひすごしぬ
三年このかた

117
或る時のわれのこころを
焼きたての
麺麭に似たりと思ひけるかな

118
たんたらたらたんたらたらと
雨滴が
痛むあたまにひびくかなしさ

119
ある日のこと
室の障子をはりかへぬ
その日はそれにて心なごみき

120
かうしては居られずと思ひ
立ちにしが
戸外に馬の嘶きしまで

121
気ぬけして廊下に立ちぬ
あらかに扉を推せしに
すぐ開きしかば

122
ぢつとして
黒はた赤のインク吸ひ
堅くかわける海綿を見る

123
誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

124
うすみどり
飲めば身体が水のごと透きとほるてふ
薬はなきか

125
いつも睨むラムプに飽きて
三日ばかり
蠟燭の火にしたしめるかな

126
人間のつかはぬ言葉
ひよつとして
われのみ知れるごとく思ふ日

127
あたらしき心もとめて
名も知らぬ
街など今日もさまよひて来ぬ

128
友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て
妻としたしむ

129
何すれば
此処に我ありや
時にかく打驚きて室を眺むる

130
人ありて電車の中に唾を吐く
それにも
心いたまむとしき

131
夜明けまであそびてくらす場所が欲し
家をおもへば
こころ冷たし

132
人みなが家を持つてふかなしみよ
墓に入るごとく
かへりて眠る

133
何かひとつ不思議を示し
人みなのおどろくひまに
消えむと思ふ

134
人といふ人のこころに
一人づつ囚人がゐて
うめくかなしさ

135
叱られて
わつと泣き出す子供心
その心にもなりてみたきかな

136
盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

137
放たれし女のごときかなしみを
よわき男の
感ずる日なり

138
庭石に
はたと時計をなげうてる
昔のわれの怒りいとしも

139
顔あかめ怒りしことが
あくる日は
さほどにもなきをさびしがるかな

140
いらだてる心よ汝はかなしかり
いざいざ
すこし呟呻などせむ

141
女あり
わがいひつけに背かじと心を砕く
見ればかなしも

142
ふがひなき
わが日の本の女等を
秋雨の夜にののしりしかな

143
男とうまれ男と交り
負けてをり
かるがゆゑにや秋が身に沁む

144
わが抱く思想はすべて
金なきに因するごとし
秋の風吹く

145
くだらない小説を書きてよろこべる
男憐れなり
初秋の風

146
秋の風
今日よりは彼のふやけたる男に
口を利かじと思ふ

147
はても見えぬ
真直の街をあゆむごとき
こころを今日は持ちえたるかな

148
何事も思ふことなく
いそがしく
暮らせし一日を忘れじと思ふ

149
何事も金金とわらひ
すこし経て
またも俄かに不平つのり来

150
誰そ我に
ピストルにても撃てよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

151
やとばかり
桂首相に手とられし夢みて覚めぬ
秋の夜の二時

煙

一

152
病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

153
己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

154
青空に消えゆく煙
さびしくも消えゆく煙
われにし似るか

155
かの旅の汽車の車掌が
ゆくりなくも
我が中学の友なりしかな

156
ほとばしる喞筒の水の
心地よさよ
しばしは若きこころもて見る

157
師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが学業のおこたりの因

158
教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寝に行きしかな

159
不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心

160
かなしみといはばいふべき
物の味
我の嘗めしはあまりに早かり

161
晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

162
夜寝ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり

163
よく叱る師ありき
髯の似たるより山羊と名づけて
口真似もしき

164
われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

165
城址の
石に腰掛け
禁制の木の実をひとり味ひしこと

166
その後に我を捨てし友も
あの頃はともに書読み
ともに遊びき

167
学校の図書庫の裏の秋の草
黄なる花咲きし
今も名知らず

168
花散れば
先づ人さきに白の服着て家出づる
我にてありしか

169
今は亡き姉の恋人のおとうととと
なかよくせしを
かなしと思ふ

170
夏休み果ててそのまま
かへり来ぬ
若き英語の教師もありき

171
ストライキ思ひ出でても
今は早や我が血躍らず
ひそかに淋し

172
盛岡の中学校の
露台の
欄干に最一度我を倚らしめ

173
神有りと言ひ張る友を
説きふせし
かの路傍の栗の樹の下

174
西風に
内丸大路の桜の葉
かさこそ散るを踏みてあそびき

175

そのかみの愛読の書よ
大方は
今は流行らずなりにけるかな

176

石ひとつ
坂をくだるがごとくにも
我けふの日に到り着きたる

177

愁ひある少年の眼に羨みき
小鳥の飛ぶを
飛びてうたふを

178

解剖せし
蚯蚓のいのちもかなしかり
かの校庭の木柵の下

179

かぎりなき知識の欲に燃ゆる眼を
姉は傷みき
人恋ふるかと

180

蘇峯の書を我に薦めし友早く
校を退きぬ
まづしさのため

181

おどけたる手つきをかしと
我のみはいつも笑ひき
博学の師を

182

自が才に身をあやまちし人のこと
かたりきかせし
師もありしかな

183
そのかみの学校一のなまけ者
今は真面目に
はたらきて居り

184
田舎めく旅の姿を
三日ばかり都に曝し
かへる友かな

185
茨島の松の並木の街道を
われと行きし少女
才をたのみき

186
眼を病みて黒き眼鏡をかけし頃
その頃よ
一人泣くをおぼえし

187
わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

188
先んじて恋のあまさと
かなしさを知りし我なり
先んじて老ゆ

189
興来れば
友なみだ垂れ手を揮りて
酔漢のごとくなりて語りき

190
人ごみの中をわけ来る
わが友の
むかしながらの太き杖かな

191
見よげなる年賀の文を書く人と
おもひ過ぎにき
三年ばかりは

192
夢さめてふつと悲しむ
わが眠り
昔のごとく安からぬかな

193
そのむかし秀才の名の高かりし
友牢にあり
秋のかぜ吹く

194
近眼にて
おどけし歌をよみ出でし
茂雄の恋もかなしかりしか

195
わが妻のむかしの願ひ
音楽のことにかかりき
今はうたはず

196
友はみな或日四方に散り行きぬ
その後八年
名挙げしもなし

197
わが恋を
はじめて友にうち明けし夜のことなど
思ひ出づる日

198
糸きれし紙鳶のごとくに
若き日の心かろくも
とびさりしかな

二

199
ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

200
やまひある獣のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし

201
ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聴きし雀の鳴くを
三年聴かざり

202
亡くなれる師がその昔
たまひたる
地理の本など取りいでて見る

203
その昔
小学校の柾屋根に我が投げし鞠
いかにかなりけむ

204
ふるさとの
かの路傍のすて石よ
今年も草に埋もれしらむ

205
わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄など欲しとわめく子なりし

206
二日前に山の絵見しが
今朝になりて
にはかに恋しふるさとの山

207
飴売のチャルメラ聴けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

208
このごろは
母も時時ふるさとのことを言ひ出づ
秋に入れるなり

209
それとなく
郷里のことなど語り出でて
秋の夜に焼く餅のにほひかな

210
かにかくに渋民村は恋しかり
おもひでの山
おもひでの川

211
田も畑も売りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に
心寄する日

212
あはれかの我の教へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

213
ふるさとを出で来し子等の
相会ひて
よろこぶにまさるかなしみはなし

214
石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

215
やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

216
ふるさとの
村医の妻のつつましき櫛巻などもなつかしきかな

217
かの村の登記所に来て
肺病みて
間もなく死にし男もありき

218
小学の首席を我と争ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

219
千代治等も長じて恋し
子を挙げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

220
ある年の盆の祭に
衣貸さむ踊れと言ひし
女を思ふ

221
うすのろの兄と
不具の父もてる三太はかなし
夜も書読む

222
我と共に
栗毛の仔馬走らせし
母の無き子の盗癖かな

223
大形の被布の模様の赤き花
今も目に見ゆ
六歳の日の恋

224
その名さへ忘られし頃
飄然とふるさとに来て
咳せし男

225
意地悪の大工の子などもかなしかり
戦に出でしが
生きてかへらず

226
肺を病む
極道地主の総領の
よめとりの日の春の雷かな

227
宗次郎に
おかねが泣きて口説き居り
大根の花白きゆふぐれ

228
小心の役場の書記の
気の狂れし噂に立てる
ふるさとの秋

229
わが従兄
野山の猟に飽きし後
酒のみ家売り病みて死にしかな

230
我ゆきて手をとれば
泣きてしづまりき
酔ひて荒れしそのかみの友

231
酒のめば
刀をぬきて妻を逐ふ教師もありき
村を逐はれき

232
年ごとに肺病やみの殖えてゆく
村に迎へし
若き医者かな

233
ほたる狩
川にゆかむといふ我を
山路にさそふ人にてありき

234
馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

235
あはれ我がノスタルジヤは
金のごと
心に照てり清くしみらに

236
友として遊ぶものなき
性悪の巡査の子等も
あはれなりけり

237
閑古鳥
鳴く日となれば起るてふ
友のやまひのいかになりけむ

238
わが思ふこと
おほかたは正しかり
ふるさとのたより着ける朝は

239
今日聞けば
かの幸うすきやもめ人
きたなき恋に身を入るるてふ

240
わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな

241
あはれかの男のごときたましひよ
今は何処に
何を思ふや

242
わが庭の白き躑躅を
薄月の夜に
折りゆきしことな忘れそ

243
わが村に
初ゆてイエス・クリストの道を説きたる
若き女かな

244
霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の虫こそすずろなりけれ

245
汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見え来れば
襟を正すも

246

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足軽くなり
心重れり

247

ふるさとに入りて先づ心傷むかな
道広くなり
橋もあたらし

248

見もしらぬ女教師が
そのかみの
わが学舎の窓に立てるかな

249

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聴きけれ

250

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに来て泣くはそのこと

251

ふるさとの停車場路の
川ばたの
胡桃の下に小石拾へり

252

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

秋風のこころよさに

253
ふるさとの空遠みかも
高き屋にひとりのぼりて
愁ひて下る

254
皎として玉をあざむく小人も
秋来といふに
物を思へり

255
かなしきは
秋風ぞかし
稀にのみ湧きし涙の繁に流るる

256
青に透く
かなしみの玉に枕して
松のひびきを夜もすがら聴く

257
神寂びし七山の杉
火のごとく染めて日入りぬ
静かなるかな

258
そを読めば
愁ひ知るといふ書焚ける
いにしへ人の心よろしも

259
ものなべてうらはかなげに
暮れゆきぬ
とりあつめたる悲しみの日は

260
水潦
暮れゆく空とくれなゐの紐を浮べぬ
秋雨の後

261

秋立つは水にかも似る
洗はれて
思ひことごと新しくなる

262

愁ひ来て
丘にのぼれば
名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実

263

秋の辻
四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の
あと見えずかも

264

秋の声まづいち早く耳に入る
かかる性持つ
かなしむべかり

265

目になれし山にはあれど
秋来れば
神や住まむとかしこみて見る

266

わが為さむこと世に尽きて
長き日を
かくしもあはれ物を思ふか

267

さらさらと雨落ち来り
庭の面の濡れゆくを見て
涙わすれぬ

268

ふるさとの寺の御廊に
踏みにける
小櫛の蝶を夢にみしかな

269

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

270

はたはたと黍の葉鳴れる
ふるさとの軒端なつかし
秋風吹けば

271

摩れあへる肩のひまより
はつかにも見きといふさへ
日記に残れり

272

風流男は今も昔も
泡雪の
玉手さし捲く夜にし老ゆらし

273

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

274

その昔揺籃に寝て
あまたたび夢にみし人か
切になつかし

275

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせまりし朝を思ひぬ

276

ひでり雨さらさら落ちて
前栽の
萩のすこしく乱れたるかな

277

秋の空廓寥として影もなし
あまりにさびし
烏など飛べ

278

雨後の月
ほどよく濡れし屋根瓦の
そのところどころ光るかなしさ

279

われ饑ゑてある日に
細き尾を掉りて
饑ゑて我を見る犬の面よし

280

いつしかに
泣くといふこと忘れたる
我泣かしむる人のあらじか

281

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に来れる
立ちて舞ひなむ

282

蜉鳴く
そのかたはらの石に踞し
泣き笑ひしてひとり物言ふ

283

力なく病みし頃より
口すこし開きて眠るが
癖となりにき

284

人ひとり得るに過ぎざる事をもて
大願とせし
若きあやまち

285
物怨ずる
そのやはらかき上目をば
愛づとことさらつれなくせむや

286
かくばかり熱き涙は
初恋の日にもありきと
泣く日またなし

287
長く長く忘れし友に
会ふごとき
よろこびをもて水の音聴く

288
秋の夜の
鋼鉄の色の大空に
火を噴く山もあれなど思ふ

289
岩手山
秋はふもとの三方の
野に満つる虫を何と聴くらむ

290
父のごと秋はいかめし
母のごと秋はなつかし
家持たぬ児に

291
秋来れば
恋ふる心のいとまなさよ
夜もい寝がてに雁多く聴く

292
長月も半ばになりぬ
いつまでか
かくも幼く打出でずあらむ

293
思ふてふこと言はぬ人の
おくり来し
忘れな草もいちじろかりし

294
秋の雨に逆反りやすき弓のごと
このごろ
君のしたしまぬかな

295
松の風夜昼ひびきぬ
人訪はぬ山の祠の
石馬の耳に

296
ほのかなる朽木の香り
そがなかの蕈の香りに
秋やや深し

297
時雨降るごとき音して
木伝ひぬ
人によく似し森の猿ども

298
森の奥
遠きひびきす
木のうろに臼ひく侏儒の国にかも来し

299
世のはじめ
まづ森ありて
半神の人そが中に火や守りけむ

300
はてもなく砂うちつづく
戈壁の野に住みたまふ神は
秋の神かも

301
あめつちに
わが悲しみと月光と
あまねき秋の夜となれりけり

302
うらがなしき
夜の物の音洩れ来るを
拾ふがごとくさまよひ行きぬ

303
旅の子の
ふるさとに来て眠るがに
げに静かにも冬の来しかな

忘れがたき人人

一

304
潮かをる北の浜辺の
砂山のかの浜薔薇よ
今年も咲けるや

305
たのみつる年の若さを数へみて
指を見つめて
旅がいやになりき

306
三度ほど
汽車の窓よりながめたる町の名なども
したしかりけり

307
函館の床屋の弟子を
おもひ出でぬ
耳剃らせるがこころよかりし

308
わがあとを追ひ来て
知れる人もなき
辺土に住みし母と妻かな

309
船に酔ひてやさしくなれる
いもうとの眼見ゆ
津軽の海を思へば

310
目を閉ぢて
傷心の句を誦してゐし
友の手紙のおどけ悲しも

311
をさなき時
橋の欄干に糞塗りし
話も友はかなしみてしき

312
おそらくは生涯妻をむかへじと
わらひし友よ
今もめとらず

313
あはれかの
眼鏡の縁をさびしげに光らせてゐし
女教師よ

314
友われに飯を与へき
その友に背きし我の
性のかなしさ

315
函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

316

ふるさとの
麦のかをりを懐かしむ
女の眉にこころひかれき

317

あたらしき洋書の紙の
香をかぎて
一途に金を欲しと思ひしが

318

しらなみの寄せて騒げる
函館の大森浜に
思ひしことども

319

朝な朝な
支那の俗歌をうたひ出づる
まくら時計を愛でしかなしみ

320

漂泊の愁ひを叙して成らざりし
草稿の字の
読みがたさかな

321

いくたびか死なむとしては
死なざりし
わが来しかたのをかしく悲し

322

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩も
なかば忘れぬ

323

むやむやと
口の中にてたふとげの事を呟く
乞食もありき

324
とるに足らぬ男と思へと言ふごとく
山に入りにき
神のごとき友

325
巻煙草口にくはへて
浪あらき
磯の夜霧に立ちし女よ

326
演習のひまにわざわざ
汽車に乗りて
訪ひ来し友とのめる酒かな

327
大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

328
智慧とその深き慈悲とを
もちあぐみ
為すこともなく友は遊べり

329
こころざし得ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしかな

330
かなしめば高く笑ひき
酒をもて
悶を解すといふ年上の友

331
若くして
数人の父となりし友
子なきがごとく酔へばうたひき

332
さりげなき高き笑ひが
酒とともに
我が腸に沁みにけらしな

333
呟呻嚙み
夜汽車の窓に別れたる
別れが今は物足らぬかな

334
雨に濡れし夜汽車の窓に
映りたる
山間の町のともしびの色

335
雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく雫流るる
窓硝子かな

336
真夜中の
倶知安駅に下りゆきし
女の鬢の古き痍あと

337
札幌に
かの秋われの持てゆきし
しかして今も持てるかなしみ

338
アカシヤの街樾にポプラに
秋の風
吹くがかなしと日記に残れり

339
しんとして幅広き街の
秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ

340

わが宿の姉と妹のいさかひに
初夜過ぎゆきし
札幌の雨

341

石狩の美国といへる停車場の
柵に乾してありし
赤き布片かな

342

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人人の
声の荒さよ

343

泣くがごと首ふるわせて
手の相を見せよといひし
易者もありき

344

いささかの銭借りてゆきし
わが友の
後姿の肩の雪かな

345

世わたりの拙きことを
ひそかにも
誇りとしたる我にやはあらぬ

346

汝が痩せしからだはすべて
謀叛気のかたまりなりと
いはれてしこと

347

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは
我なりしかな

348
椅子をもて我を撃たむと身構へし
かの友の酔ひも
今は醒めつらむ

349
負けたるも我にてありき
あらそひの因も我なりしと
今は思へり

350
殴らむといふに
殴れとつめよせし
昔の我のいとほしきかな

351
汝三度
この咽喉に剣を擬したりと
彼告別の辞に言へりけり

352
あらそひて
いたく憎みて別れたる
友をなつかしく思ふ日も来ぬ

353
あはれかの眉の秀でし少年よ
弟と呼べば
はつかに笑みしが

354
わが妻に着物縫はせし友ありし
冬早く来る
植民地かな

355
平手もて
吹雪にぬれし顔を拭く
友共産を主義とせりけり

356
酒のめば鬼のごとくに青かりし
大いなる顔よ
かなしき顔よ

357
樺太に入りて
新しき宗教を創めむといふ
友なりしかな

358
治まれる世の事無さに
飽きたりといひし頃こそ
かなしかりけれ

359
共同の薬屋開き
儲けむといふ友なりき
詐欺せしといふ

360
あをじろき頬に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人

361
子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

362
敵として憎みし友と
やや長く手をば握りき
わかれといふに

363
ゆるぎ出づる汽車の窓より
人先に顔を引きしも
負けざらむため

364
みぞれ降る
石狩の野の汽車に読みし
ツルゲエネフの物語かな

365
わが去れる後の噂を
おもひやる旅出はかなし
死ににゆくごと

366
わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

367
忘れ来し煙草を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き雪の野の汽車

368
うす紅く雪に流れて
入日影
曠野の汽車の窓を照せり

369
腹すこし痛み出でしを
しのびつつ
長路の汽車にのむ煙草かな

370
乗合の砲兵士官の
剣の鞘
がちやりと鳴るに思ひやぶれき

371
名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の
宿屋安けし
我が家のごと

372
伴なりしかの代議士の
口あける青き寐顔を
かなしと思ひき

373
今夜こそ思ふ存分泣いてみむと
泊りし宿屋の
茶のぬるさかな

374
水蒸気
列車の窓に花のごと凍てしを染むる
あかつきの色

375
ごおと鳴る凩のあと
乾きたる雪舞ひ立ちて
林を包めり

376
空知川雪に埋れて
鳥も見えず
岸辺の林に人ひとりゐき

377
寂寞を敵とし友とし
雪のなかに
長き一生を送る人もあり

378
いたく汽車に疲れて猶も
きれぎれに思ふは
我のいとしさなりき

379
うたふごと駅の名呼びし
柔和なる
若き駅夫の眼をも忘れず

380

雪のなか
処処に屋根見えて
煙突の煙うすくも空にまよへり

381

遠くより
笛ながながとひびかせて
汽車今とある森林に入る

382

何事も思ふことなく
日一日
汽車のひびきに心まかせぬ

383

さいはての駅に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

384

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

385

こほりたるインクの罎を
火に翳し
涙ながれぬともしびの下

386

顔とこゑ
それのみ昔に変らざる友にも会ひき
国の果にて

387

あはれかの国のはてにて
酒のみき
かなしみの滓を啜るごとくに

388
酒のめば悲しみ一時に湧き来るを
寐て夢みぬを
うれしとはせし

389
出しぬけの女の笑ひ
身に沁みき
厨に酒の凍る真夜中

390
わが酔ひに心いためて
うたはざる女ありしが
いかになれるや

391
小奴といひし女の
やはらかき
耳朶なども忘れがたかり

392
よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手のあたたかさかな

393
死にたくはないかと言へば
これ見よと
咽喉の痍を見せし女かな

394
芸事も顔も
かれより優れたる
女あしざまに我を言へりとか

395
舞へといへば立ちて舞ひにき
おのづから
悪酒の酔ひにたふるるまでも

396
死ぬばかり我が酔ふをまちて
いろいろの
かなしきことを囁きし人

397
いかにせしと言へば
あをじろき酔ひざめの
面に強ひて笑みをつくりき

398
かなしきは
かの白玉のごとくなる腕に残せし
キスの痕かな

399
酔ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり

400
火をしたふ虫のごとくに
ともしびの明るき家に
かよひ慣れにき

401
きしきしと寒さに踏めば板軋む
かへりの廊下の
不意のくちづけ

402
その膝に枕しつつも
我がこころ
思ひしはみな我のことなり

403
さらさらと氷の屑が
波に鳴る
磯の月夜のゆきかへりかな

404
死にしとかこのごろ聞きぬ
恋がたき
才あまりある男なりしが

405
十年まへに作りしといふ漢詩を
酔へば唱へき
旅に老いし友

406
吸ふごとに
鼻がぴたりと凍りつく
寒き空気を吸ひたくなりぬ

407
波もなき二月の湾に
白塗の
外国船が低く浮かべり

408
三味線の絃のきれしを
火事のごと騒ぐ子ありき
大雪の夜に

409
神のごと
遠く姿をあらはせる
阿寒の山の雪のあけぼの

410
郷里にゐて
身投げせしことありといふ
女の三味にうたへるゆふべ

411
葡萄色の
古き手帳にのこりたる
かの会合の時と処かな

412
よごれたる足袋穿く時の
気味わるき思ひに似たる
思出もあり

413
わが室に女泣きしを
小説のなかの事かと
おもひ出づる日

414
浪淘沙
ながくも声をふるはせて
うたふがごとき旅なりしかな

二

415
いつなりけむ
夢にふと聴きてうれしかりし
その声もあはれ長く聴かざり

416
頬の寒き
流離の旅の人として
路問ふほどのこと言ひしのみ

417
さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聴きつらむ
それだけのこと

418
ひややかに清き大理石に
春の日の静かに照るは
かかる思ひならむ

419
世の中の明るさのみを吸ふごとき
黒き瞳の
今も目にあり

420
かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれど

421
真白なるランプの笠の
瑕のごと
流離の記憶消しがたきかな

422
函館のかの焼跡を去りし夜の
こころ残りを
今も残しつ

423
人がいふ
鬢のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし

424
馬鈴薯の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ

425
山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

426
忘れをれば
ひよつとした事が思ひ出の種にまたなる
忘れかねつも

427
病むと聞き
癒えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

428
君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ

429
かの声を最一度聴かば
すつきりと
胸や霽れむと今朝も思へる

430
いそがしき生活のなかの
時折のこの物おもひ
誰のためぞも

431
しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

432
死ぬまでに一度会はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

433
時として
君を思へば
安かりし心にはかに騒ぐかなしさ

434
わかれ来て年を重ねて
年ごとに恋しくなれる
君にしあるかな

435

石狩の都の外の
君が家
林檎の花の散りてやあらむ

436

長き文
三年のうちに三度来ぬ
我の書きしは四度にかあらむ

437

手套を脱ぐ時

手套を脱ぐ手ふと休む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり

438

いつしかに
情をいつはること知りぬ
髭を立てしもその頃なりけむ

439

朝の湯の
湯槽のふちにうなじ載せ
ゆるく息する物思ひかな

440

夏来れば
うがひ薬の
病ある歯に沁む朝のうれしかりけり

441

つくづくと手をながめつつ
おもひ出でぬ
キスが上手の女なりしが

442

さびしきは
色にしたしまぬ目のゆゑと
赤き花など買はせけるかな

443

新しき本を買ひ来て読む夜半の
そのたのしさも
長くわすれぬ

444

旅七日
かへり来ぬれば
わが窓の赤きインクの染みもなつかし

445

古文書のなかに見いでし
よごれたる
吸取紙をなつかしむかな

446

手にためし雪の融くるが
ここちよく
わが寐飽きたる心には沁む

447

薄れゆく障子の日影
そを見つつ
こころいつしか暗くなりゆく

448

ひやひやと
夜は薬の香のにほふ
医者が住みたるあとの家かな

449

窓硝子
塵と雨とに曇りたる窓硝子にも
かなしみはあり

450
六年ほど日毎日毎にかぶりたる
古き帽子も
棄てられぬかな

451
こころよく
春のねむりをむさぼれる
目にやはらかき庭の草かな

452
赤煉瓦遠くつづける高塀の
むらさきに見えて
春の日ながし

453
春の雪
銀座の裏の三階の煉瓦造に
やはらかに降る

454
よごれたる煉瓦の壁に
降りて融け降りては融くる
春の雪かな

455
目を病める
若き女の倚りかかる
窓にしめやかに春の雨降る

456
あたらしき木のかをりなど
ただよへる
新開町の春の静けさ

457
春の街
見よげに書ける女名の
門札などを読みありくかな

458
そことなく
蜜柑の皮の焼くるごときにほひ残りて
夕となりぬ

459
にぎはしき若き女の集会の
こゑ聴き倦みて
さびしくなりたり

460
何処やらに
若き女の死ぬごとき悩ましさあり
春の霙降る

461
コニヤツクの酔ひのあとなる
やはらかき
このかなしみのすずろなるかな

462
白き皿
拭きては棚に重ねゐる
酒場の隅のかなしき女

463
乾きたる冬の大路の
何処やらむ
石炭酸のにほひそめり

464
赤赤と入日うつれる
河ばたの酒場の窓の
白き顔かな

465
新しきサラドの皿の
酢のかをり
こころに沁みてかなしき夕

466
空色の罎より
山羊の乳をつぐ
手のふるひなどいとしかりけり

467
すがた見の
息のくもりに消されたる
酔ひのうるみの眸のかなしさ

468
ひとしきり静かになれる
ゆふぐれの
厨にのこるハムのにほひかな

469
ひややかに罎のならべる棚の前
歯せせる女を
かなしとも見き

470
やや長きキスを交して別れ来し
深夜の街の
遠き火事かな

471
病院の窓のゆふべの
ほの白き顔にありたる
淡き見覚え

472
何時なりしか
かの大川の遊船に
舞ひし女をおもひ出にけり

473
用もなき文など長く書きさして
ふと人こひし
街に出てゆく

474
しめらへる煙草を吸へば
おほよその
わが思ふことも軽くしめれり

475
するどくも
夏の来るを感じつつ
雨後の小庭の土の香を嗅ぐ

476
すずしげに飾り立てたる
硝子屋の前にながめし
夏の夜の月

477
君来るといふに夙く起き
白シヤツの
袖のよごれを気にする日かな

478
おちつかぬ我が弟の
このごろの
眼のうるみなどかなしかりけり

479
どこやらに杭打つ音し
大桶をころがす音し
雪ふりいでぬ

480
人気なき夜の事務室に
けたたましく
電話の鈴の鳴りて止みたり

481
目さまして
ややありて耳に入り来る
真夜中すぎの話声かな

482
見てをれば時計とまれり
吸はるるごと
心はまたもさびしさに行く

483
朝朝の
うがひの料の水薬の
鰻がつめたき秋となりにけり

484
夷かに麦の青める
丘の根の
小径に赤き小櫛ひろへり

485
裏山の杉生のなかに
斑なる日影這ひ入る
秋のひるすぎ

486
港町
とろろと鳴きて輪を描く鳶を圧せる
潮ぐもりかな

487
小春日の曇硝子にうつりたる
鳥影を見て
すずろに思ふ

488
ひとならび泳げるごとき
家家の高低の軒に
冬の日の舞ふ

489
京橋の瀧山町の
新聞社
灯ともる頃のいそがしさかな

490
よく怒る人にてありしわが父の
日ごろ怒らず
怒れと思ふ

491
あさ風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

492
ゆゑもなく海が見たくて
海に来ぬ
こころ傷みてたへがたき日に

493
たひらなる海につかれて
そむけたる
目をかきみだす赤き帯かな

494
今日逢ひし町の女の
どれもどれも
恋にやぶれて帰るごとき日

495
汽車の旅
とある野中の停車場の
夏草の香のなつかしかりき

496
朝まだき
やつと間に合ひし初秋の旅出の汽車の
堅き麺麭かな

497
かの旅の夜汽車の窓に
おもひたる
我がゆくすゑのかなしかりしかな

498
ふと見れば
とある林の停車場の時計とまれり
雨の夜の汽車

499
わかれ来て
燈火小暗き夜の汽車の窓に弄ぶ
青き林檎よ

500
いつも来る
この酒肆のかなしさよ
ゆふ日赤赤と酒に射し入る

501
白き蓮沼に咲くごとく
かなしみが
酔ひのあひだにはつきりと浮く

502
壁ごしに
若き女の泣くをきく
旅の宿屋の秋の蚊帳かな

503
取りいでし去年の袷の
なつかしきにほひ身に沁む
初秋の朝

504
気にしたる左の膝の痛みなど
いつか癒りて
秋の風吹く

505
売り売りて
手垢きたなきドイツ語の辞書のみ残る
夏の末かな

506
ゆゑもなく憎みし友と
いつしかに親しくなりて
秋の暮れゆく

507
赤紙の表紙手擦れし
国禁の
書を行李の底にさがす日

508
売ることを差し止められし
本の著者に
路にて会へる秋の朝かな

509
今日よりは
我も酒など呷らむと思へる日より
秋の風吹く

510
大海の
その片隅につらなれる島島の上に
秋の風吹く

511
うるみたる目と
目の下の黒子のみ
いつも目につく友の妻かな

512
いつ見ても
毛糸の玉をころがして
鞾を編む女なりしが

513
葡萄色の
長椅子の上に眠りたる猫ほの白き
秋のゆふぐれ

514

ほそぼそと
其処ら此処らに虫の鳴く
昼の野に来て読む手紙かな

515

夜おそく戸を繰りをれば
白きもの庭を走れり
犬にやあらむ

516

夜の二時の窓の硝子を
うす紅く
染めて音なき火事の色かな

517

あはれなる恋かなと
ひとり呟きて
夜半の火桶に炭添へにけり

518

真白なるランプの笠に
手をあてて
寒き夜にする物思ひかな

519

水のごと
身体をひたすかなしみに
葱の香などのまじれる夕

520

時ありて
猫のまねなどして笑ふ
三十路の友のひとり住みかな

521

気弱なる斥候のごとく
おそれつつ
深夜の街を一人散歩す

522
皮膚がみな耳にてありき
しんとして眠れる街の
重き靴音

523
夜おそく停車場に入り
立ち坐り
やがて出でゆきぬ帽なき男

524
気がつけば
しつとりと夜霧下りて居り
ながくも街をさまよへるかな

525
若しあらば煙草恵めと
寄りて来る
あとなし人と深夜に語る

526
曠野より帰るごとくに
帰り来ぬ
東京の夜をひとりあゆみて

527
銀行の窓の下なる
舗石の霜にこぼれし
青インクかな

528
ちよんちよんと
とある小藪に頬白の遊ぶを眺む
雪の野の路

529
十月の朝の空気に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

530
十月の産病院の
しめりたる
長き廊下のゆきかへりかな

531
むらさきの袖垂れて
空を見上げゐる支那人ありき
公園の午後

532
孩児の手ざはりのごとき
思ひあり
公園に来てひとり歩めば

533
ひさしぶりに公園に来て
友に会ひ
堅く手握り口疾に語る

534
公園の木の間に
小鳥あそべるを
ながめてしばし憩ひけるかな

535
晴れし日の公園に来て
あゆみつつ
わがこのごろの衰へを知る

536
思出のかのキスかとも
おどろきぬ
プラタスの葉の散りて触れしを

537
公園の隅のベンチに
二度ばかり見かけし男
このごろ見えず

538
公園のかなしみよ
君の嫁ぎてより
すでに七月来しこともなし

539
公園のとある木蔭の捨椅子に
思ひあまりて
身をば寄せたる

540
忘られぬ顔なりしかな
今日街に
捕吏にひかれて笑める男は

541
マチ擦れば
二尺ばかりの明るさの
中をよぎれる白き蛾のあり

542
目をとぢて
口笛かすかに吹きてみぬ
寐られぬ夜の窓にもたれて

543
わが友は
今日も母なき子を負ひて
かの城址にさまよへるかな

544
夜おそく
つとめ先よりかへり来て
今死にしてふ児を抱けるかな

545
二三こゑ
いまはのきはに微かにも泣きしといふに
なみだ誘はる

546

真白なる大根の根の肥ゆる頃
うまれて
やがて死にし児のあり

547

おそ秋の空気を
三尺四方ばかり
吸ひてわが児の死にゆきしかな

548

死にし児の
胸に注射の針を刺す
医者の手もとにあつまる心

549

底知れぬ謎に対ひてあるごとく
死児のひたひに
またも手をやる

550

かなしみの強くいたらぬ
さびしさよ
わが児のからだ冷えてゆけども

551

かなしくも
夜明くるまでは残りゐぬ
息きれし児の肌のぬくもり